プラスロジック

有檻侍裏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プラスロジック

【Ｎコード】
Ｎ５７１６Ｗ

【作者名】
有檻侍裏

【あらすじ】
卓越した技術は時として魔法と見分けがつかないそうだ。進化した技術はやがては世界の理さえも塗り替え、また素晴らしいモノも生み出すだろう。

魔学研究大学付属第一学園、春。
憧れを胸に抱いて門をくぐるのは希望を持った新入生たち。しかし、その中にはやる気のなさそうな一人の男子生徒が悠然と歩いていた。

そんな時、校門の近くで突如発生した決闘から一躍時の人となってしまった少年、要直次はひょんなことからある団体に目をつけられることに。はたして直次の運命は！？

プロローグ

進み過ぎた技術は、時として魔法と見分けがつかないものだ。
子供に車が走る原理を説いても疑問符を浮かべるだけで、結局理解するのはせいぜい“車は走るモノ”程度の認識だ。
説明の仕方によっては車は“危険なモノ”だし、時として“憧れ”にもなりうる。
車は魔法で動いているわけじゃない。単純に仕組みを説明すれば――車にはエンジンがあり、それが動く事によってそれに繋がっているタイヤが動き、走り出す――といったところだ。
もちろんそのエンジンが動くためにはガソリンが必要だったり、更に他の部品を必要としたりと、数え上げればきりがない。

では魔法の仕組みとは何だろうか？

世界に名だたる歴史書や魔術書を紐解けば分かるかもしれない。
その道の研究者に尋ねればヒントぐらいはくれるかもしれない。

だが、私は思うのだ。

魔法とは、限りなく希望に満ち溢れている物である、と。

とある研究者の手記より、冒頭部分を引用。

第一章：実力社会におけるヒエラルキー（1）

アスファルトの黒い地面を走るのは未だに車輪の付いた四輪駆動車だ。宙に浮かぶ車は開発されているものの、未だ実用段階には至っていない。

それでも更なる安全性と機能向上を目指した結果、鋭角とも流線型とも取れる形が主流となっている。

色もどことなくメタリックが多いのも、言われてみれば未来だ、と言えるかもしれない。

東京都、北東の地域に建てられた世界の最先端を凝縮した場所がある。

魔学研究大学付属第一学園。通称“第一魔研”。

近年において研究が進められる、魔法という技術を扱う学校だ。

※　※　※

そもそもの始まりは定かではない。ただ、魔法と言う技術がはっきりと認識されたのは世界規模での異常現象に伴う、人ならざる力を持つ者達が現れてからだ。

最も有名なのは欧州連合の“三賢人（マギ）”、欧米の“共同体（ロッジ）”、そして日本の“十三会団”。

彼らはその異常現象に際し、自らの力を持ってそれを鎮め、ある日、世界に宣誓を行った。

『時は来たれり。我らが力を知れ』と。

春になり桜が風に乗って散り始めるこの季節は、ここ第一魔研として新たなスタートを切る者達が大挙して押し寄せる。全国で魔法の研究、並びに技術の獲得をせんとする場所は合計八か所。

東京都はその中でも二校を有するのだが、圧倒的に人気があるのはなぜか第一魔研で、毎年熾烈な入学争いが繰り広げられる。

そのため新入生の多くは既に周囲を敵と認識するものも多く、自分こそが優秀であると睨みをきかせていた。

その中で、たった一人気怠けそうな表情の者が居る。

やや線の細い高身長、眼つきは終始眠そうで春の陽気が未だに彼を蝕んでいるらしい、時折欠伸をしながら前方へ進んでいく。

右腰には革製のポーチをぶら下げ、左腰には銃器のようなものが収まった、ホルスターを吊っている。

黒い鞄を肩に担いだその少年は、その顔つきとは裏腹にしっかりとした歩みで、スルスルと人通りの多い校門への道のりを辿っていく。

「ああ、やっぱ面倒そうだな」

ぽつりとつぶやいた言葉は周囲には聞こえていない。仮に聞こえ

たとしたら彼は嫌みの一つでも言われているだろう。
第一魔研に入れた生徒はみな憧れを抱いてこの道を行くのだ。それが面倒などと言う輩がいたら粛清されてもおかしくはない。

ようやく桜の道も終わりが見え、校門が見えてきた頃、彼は周囲がいつの間にか止まっている事に気付いた。
皆の視線を辿れば校門手前の少し開けた場所が円形に囲まれているのがわかる。いつの間にか出来ていた人だかりの中心はどうやら、強気そうな二人組の生徒と座り込む男子生徒、もう一人それを庇うように仁王立ちする女子生徒だ。
喧騒のさなか、ガラの悪そうな声が一際目立つ。

「貴様！　俺達にぶつかっておいて、すいませんで済むと思っているのか！」

どうにも頭の出来がよろしくなさそうながなり声が、座り込む男子生徒に浴びせられる。びくり、と僅かに男子が反応するものの、俯いたまま表情は見えない。頬に手を当てていることから、おおよそどちらかに殴られでもしたのだろう。

「止めなさいよ、私さっき見てたけど、どうみてもぶつかって来たのはあんた達の方よ！」
対したのは凛とした顔つきの女子生徒だ。赤と言うよりは紅と表現すべきその髪が、風になびいて色を散らす。定かではないがこの学園内においてもかなり美人の部類に入るのではないか。

「女風情が口を出すんじゃねぇ！　……おい、てめえその女に守ら

れてるだけか？　言い返す事も出来ねぇのかよ」

挑発めいたその言葉にも男子生徒は反応しない。どころか後ずさりをして群衆の輪を抜け、校舎の方へ走り去っていく。

「あ、待ちやがれ！」

「ちょ、ちょっと！」

残されたのは怒りの矛先を失った二人と、茫然と取り残された女子生徒。

当然その矛先は。

「……ちっ、おいそこのアマ、こうなりゃてめえでいい。俺達と“決闘”しろっ！」

「！　――いいわ、その決闘、受けましょう！」

群衆の輪がさらに広がる。それはこの決闘が危険を孕むものだと理解しているからだ。

魔法という技術を習得する際、彼らにはその魔法を扱うための道具が与えられた。それは先人達が用いていた特殊な儀式、祭具を必要としない代わりに現代における高科学の技術を取り入れている。“魔法技術用特殊演算機（プラスロジック）”――通称デバイスと呼ばれるこの機械は先人達が用いた儀式を簡略化し、様々な現象を引き起こすために必要なものだ。

その形状、能力は個人の技量を見定めるのにも役立っている。

基本、デバイスは大きければ大きいほど力を使える容量(メモリ)が増えるため、高難度の魔法を扱えるものの、スピードが遅く、小さければ小さいほどスピードは上がるが、より簡単な魔法しか扱う事が出来ない。

二人組が自身の腰のポーチから取り出したのは、クローバーの葉を象った先端を持つロッド。空洞の中心には黒い宝石の様なものが嵌めこまれ、いくつかの文字が宝石の中で躍る。

一方少女が取りだしたのは鉄扇と柄のみのおそらく刀。ザンッ！と広げられた鉄扇には呪文の様な文字が刻まれ、腰だめに構える刀は居合の構え。

しばしの沈黙。吹き荒れた突風が桜を揺らすと同時に先に動いたのは二人組だった。

「“捕まえろ(snake)”」

短い声に反応して現れたのは炎の身体を持つ蛇。シューシューと音を立てて少女に迫るその蛇は、しかし彼女が振るった一太刀で脆くも崩れ去る。

刃が無いはずの刀にはいつの間にか水の刃が出来ていた。それに呼応するように鉄扇からは青白い光が灯っている。

「だったら“貫け(spear)”！」

防がれた次には空気を焼く一本の槍が宙を迸る。少女の手前の地面を抉り土煙をまき散らすと、二人は続けて魔法を放ち続ける。

「や、やったか？」
煙が晴れてうっすらと見えるシルエットに変化はない。初めに披露した居合の構えのまま少女はその場に立っていた。
「……もう終わり？　なら、今度はこっちから行かせてもらうよ！」
叫んだ途端と同時、鉄扇を軽く撫でる。緑色に発光した鉄扇を構えつつ、前方へ滑るようにして男子生徒の眼前に迫ると刀を振るう。
突如発生したのは収束された突風。咄嗟にロッドを使ってガードしたものの、力及ばず僅かに後退する。
割り込むように入って来たのはもう一人の男子生徒。今度はロッドで直接殴りつけるが、鉄扇に阻まれそのまま拮抗する――かと思われた。
「私、武器二つ持ってるのよ？」

「あ、ぐううぅぅ！」

流れるような鋭い一撃がガラ空きの腹部に決まった。耐えきれず手放したロッドが地面を転がり一撃を受けた男子は悶絶している。
「お、おい大丈夫か！？」
横たわる男子生徒の腹部から僅かに赤色が広がる。風の刃がもたらした傷は、それほど深くはないものの男子生徒の戦意を削ぐには充分過ぎた。
「――続けるわよ。これは決闘でしょう？」
だが、少女から告げられたのは無慈悲な言葉。そこに容赦の思いはない。

――危険だ。おそらく彼女は多分熱くなりすぎている。
おそらく彼女にとってこれは初めての実戦なのだ。逃げ腰になっ

ている男子生徒をいたぶる様に追いつめ、その表情には時折愉悦が混じり始めた。
それでも周囲はまるで動く気配がない。どころか遂には野次まで飛ぶ始末で、校舎の方からも遠巻きに見つめる集団が増え始める。

「はあぁーあ、まーた面倒事だ」
思わず独りごちる。厄介事は尽きることはない、それどころか増えて行く一方で彼は自分の人生を少しばかり悩んでみる。
数秒間だけ悩んでみたものの、結局いつもの結論に達してしまったのを悟った彼は、人だかりに割り込むようにして進んでいく。

人生なんて、なるようにしかならないのだから、と。

実力社会におけるヒエラルキー（2）

「随分と楽しそうだな。俺も混ぜてくれよ」
抑揚のない声が目の前で弾けたと思った時には、彼女が降りおろそうとしていた刀は予期せぬ闖入者によって止められていた。
力強い眼差しでその闖入者を睨むものの、返って来た反応はひどくやる気の無さそうな声音。

「はあ、やだやだ。遠目で見た時は結構な美人だったのに、近寄って見ればどこの修羅だよ」
「っつ！　ふざけないで！」

言葉と態度の両方に苛付き胸部を狙った鉄扇の突きを放つ。しかし、それをいとも簡単に躱す男は後ろに下がると同時、負傷している男子生徒の首根っこを掴んで群衆の輪に放り投げた。
「そいつ怪我人だから早めに治療室運んでやってくれ」
思わず受け止めた別の男子生徒に向かって声を張り上げると改めて周囲を確認する。

男子生徒はまだ怯えているものの自分の武器をしっかりと掴んでいる。すぐに動くことはなさそうだが、時間がたてば怒りで何をするかわからない。
一方で少女の方も新たな闖入者に対して警戒を強めている。

「あんた何様のつもり？　こっちは神聖な決闘の最中よ。邪魔をしないで！」
（神聖な決闘、ねぇ……）
あまりな言い方に思わず出そうになる笑いを堪えた。児戯にも等しいこの遊びを決闘呼ばわりするなんて、今すぐにでも笑い転げて

しまいたいぐらいだ。

ハッキリ言ってレベルが低すぎる。基礎程度の魔法を披露して何が楽しいのだろうか。

「ちゃんばらごっこなら帰ってやれよ。ここは魔法を習う場所だぜ」

「――もういい。あんたも敵とみなすわ」

鉄扇を目一杯開く。広げた全ての面を指で一撫ですると、銀の光をまき散らす。それが刀の柄に取りつくように収束されてその本来の姿を取り戻す。

現れたのは鋼の刃である。反り返った刀身のそれは日本刀。殺傷性の高い刀剣類は基本的に刃を潰してあれば所持が可能となっていた。これは魔法と言う技術が現れたがための措置でもある。

しかしこの刀はどう見ても刃は潰されていない。簡単に人を殺める事が出来るれっきとした武器である。

「もう容赦はしない。これであんたを切り刻んであげ――」

だから彼は容赦をしない事に決めた。

ホルスターに収まっていた物を取りだす。銃身の代わりに金属製の板を重ねたような部品が付いた銃器型のデバイス。それにグリップ部分の本来ならマガジンを装填する部分に拡張装備（カートリッジ）を装着。

大雑把な狙いを付けて少女の方へ引き金を引いた。

空気を破裂させたような音が響く。一つは彼女の刀を握る手に。二つ目は広げられた鉄扇の中心。そしてもう一つは彼女の腹部へ――。

合計三発の見えない衝撃が彼女の武装を瞬く間に解く。喋っている途中の彼女を吹き飛ばしても、構えた銃型デバイスは向けられたままだ。

さらにもう一度、今度は倒れ込んだ少女の頭を掠めるように二発の魔法を撃ち込む。

いま使った魔法に殺傷性はない。空気の塊を一瞬で凝縮、膨張させるだけの簡単な魔法だ。あまり応用は効かないものの、狙いを定めやすく相手に大きな怪我を負わせることもないので比較的扱いやすい魔法でもある。

それでも衝撃自体は凄まじいものだ。頭部に喰らえば当たりどころによっては脳震盪も引き起こすし、立て続けに同じ場所に当てれば骨だって折る事が出来る。

「まだやるかい？　こっちはあんまり時間が無いんだけど？」

返事はない。地面に座り込んだ少女は茫然としてその言葉にも気付いていないようだった。

「……答えないならもう二、三発撃ち込んで――」
「な、何それ……無防備な相手に向かって魔法を使うなんて、そ、そんなのルール違反――きゃっ！」

かろうじて発した言葉はまたしても破裂音に遮られる。身を縮こまらせる少女に非情な攻撃を加え続ける少年。
いつの間にかこの場は少年が支配する空間となってしまう。ロッドを握っていた男子生徒はその光景を見て戦意を失くし、固唾をのんで見守っていた群衆には奇妙な静けさが漂い始める。

「ルール？　俺は決闘をしてるわけじゃない、むしろ邪魔しに来たんだ」

「ど、どういうことよ？」

「今日、一体何の日だかわかってるかい？」

言いつつひらりと群衆の輪に紛れて、校門の中へ身を進ませる。去り際に一言、ぽつりと呟いて。

「あんたらも急いだ方がいいんじゃないのか？　――今日は始業式だぜ？」

その意味を周囲が遅まきながら気付いたころ、校舎の方から時間を告げる鐘の音が鳴り響く。

※　※　※

校舎の方から校門を覗いていた一人の生徒が、もう一人の生徒へ乾いた笑いをこぼす。

「ハハハッ、随分と妹のプライドをへし折ってくれるじゃない。感心しちゃうなぁ」

「溺愛しておるのか嫌悪しておるのか、いまいち分かりにくい言葉じゃな」

その校門から一人の生徒がこちらのほうへ急いで走って来る。先ほど少女を打ち負かしたあの少年だ。彼が校舎の中へ入っていくのを見届けてから、生徒は窓のカーテンを閉め切る。

「さて――彼の素質はいかがでしょう、会長？」

「その意気やよし。しかし些か不安も残る」

会長と呼ばれたその生徒は、手にした黒い棒を一振りさせ、暗い室内に電気を灯す。何のことはない、彼が先ほど使った魔法をその場から動かずにただスイッチを付けただけ。

呆れたように肩をすくめる生徒の一人がその行動に対して感想を述べる。

「あなたの実力は充分に分かっていますし、面倒なのも分かりますけど……横着しすぎじゃありません？」

「ふん、ならば妾に届くようにスイッチを低く付けたらどうじゃ！
これは何の嫌がらせじゃ！」

会長と呼ばれた少女の身長はせいぜい百三十五センチあるかないか。それに対してこの部屋の電気スイッチはどうみても高い位置にある。

「それはもちろん。僕の趣味ですよ、会長」

その原因は彼にあった。にっこりとほほ笑んだその表情には、いっそ爽やかとも思える邪気が滲み出ていた。
「会長が一生懸命背伸びをして決して届かないスイッチに手を伸ばす姿……ああもう、想像しただけで健気過ぎて思わず涙が」

ハンカチを取り出して涙を拭く仕草を見せる生徒。それに対して会長はただ呆れるばかり。

「――まあ会っていきなり“生徒会に来い”などと言うつもりはない」
「ほう。私の時は強引に連れ込まれたわけですが」
「いちいち人の揚げ足を取るでないわ。ともかく、もうすぐ始まる始業式の時にでもモーションを掛けては見るが……」

果たして、乗って来るじゃろうか――。

※　※　※

始業式は大幅に遅れて進行していた。時間にして一時間ほどであったが、一部の生徒には欠席者が出たり、校門での騒ぎに対してこの後指導室送りとなる生徒も複数、この講堂内に落ち着きなく座っている。

先ほど少年に一方的にやられた少女、七海琴音（ななみことね）もその指導室送りの生徒に入っていた。

実を言うと最初にこの講堂の中に入った時から、少女を叩きのめした少年は見つけている。

なぜならその少年は、彼女の隣で素知らぬふりをして講堂のステージを見つめているのだ。腹立たしいことこの上ない。

見つけた瞬間に一度怒鳴りつけてやろうかと思ってさえいた。しかし、ここは教師の目もある上に、これ以上の騒ぎを起こすのは自分の心象がさらに悪くなること間違いなしだ。それだけは避けねばならない。

そんなわけで彼女は心の中で彼を罵倒しながら、落ち着きなく座っているのだった。

一方で少年――要直次（かなめなおつぐ）は、そんな少女の様子に気付きながらも講堂のステージで喋る人間に、熱い視線を送っていた。それも、決して好意的ではない言うなれば勘弁してくれ、という類の視線である。

講堂の上で喋っているのは紹介にあった話からすれば、この学校の生徒会長らしい、名前は確か九重九々理（ここのえくくり）といったか。

初めに見た時は思わず中等部の生徒かと見間違えたほどで、壇上で喋っている姿からは威厳と呼ぶべきものは微塵も見当たらない。
可愛らしいと評価すべきその容姿であるが、今その彼女が度々直次の方へ視線を向けているのだ。目を付けられるようなことはしていない、はずだ。
それだけではない。彼女が話すたびに、直次の耳に不快な音声が紛れこんでくるのだ。壇上で話す九々理の声と同じ、しかし全く内容の異なる声が。

「新入生の諸君が我が学び舎に入学してきてくれた事を嬉しく思う。これから三年、もしくはそれ以上の年月を共にするこの新しき友を妾は歓迎しようぞ」
『今朝がたの騒ぎにおける貴様の行動は、見事と言えないが及第点であったぞ。その力を妾の下で振るってみてはくれぬか？』

空気の振動ルートを制御し特定の人物にのみ情報を伝えるこの魔法は、熟練したものが使えば言葉を発することなく相手に言葉を伝えることが出来る特殊な魔法だ。
大勢の人間が居る中から特定の人物に対して情報をやり取りできるという点では、優れた魔法の一つだ。しかし、それは情報を受け取る側がその情報を正確に識別できる技量があって初めて効果のある魔法だ。
つまり、彼の耳には今、二人の人物に同時に話しかけられている状態といっていい。さらに二人の人物は全く同一なため、文章が混じりあって正確な意味を成していない。

そんなことはいざ知らず、好き勝手な事を話し続けること数分。
結局彼の耳が聞き取れたのはこの一言だけだった。

『後で使いの者を寄越す』、と。

実力社会におけるヒエラルキー（3）

魔法という技術が世の中に浸透するにつれ、世界中である変化が起きていた。
突然与えられた魔法という力に対し、世界はそれまでの常識を捨てざるを得ない状態となり、結果としてその様相はより単純な実力社会へと変貌を遂げたのだ。

それに、魔法は誰もが扱える万能の力ではなく、ある一定の才能が必要な特別な技術だった事がさらに拍車をかけていた。

高位の存在である魔法師、世界中に存在する魔法学生、それに、魔法を使えない一般の
人間。この関係が世界における絶対の格差として、日々世の中を騒がしている。

第一魔研はその中でも高位の魔法師を排出する名門校の一つだ。その道は魔法の研究職を目指す若者や、軍事関係に従事するものを主とした人物が多く、特に新種の魔法を生み出すことに関しては一番といっていいほどの実績がある。

さらにこの学園の利点はそれだけではない。

学園を支援する有名なデバイスメーカーの新型デバイスを、いち早く試すことが出来るのも人気の一つだ。

※　※　※

「ねえ、その銃型デバイス……もしかしてティアドロップ社の最新モデルかい？」

始業式が終わって自分が振り分けられた教室に入った時のことだ。彼が所属するクラスは１－Ａ。そのクラスに足を踏み入れたその時に背後から彼は見覚えのない男に話しかけられた。

「ちょっと見させてもらってもいいかい？　いいよね？」

「あ、ああ」

あまりの剣幕につい頷いてしまった直次をよそに、男は腰のホルスターから直次のデバイスを取りだす。

銃身に施された一粒の雫とその波紋を描いた精巧な装飾。決して派手さはないが、落ち着いたフォルムと特定の魔法以外では極端に性能が落ちるピーキーな性能が人気のティアドロップ社製のデバイス。

発売名称は『ＭＧＭＡ（マテガワ・ゲンゴロウ・メルティアー）』。その名が示す通り空気を扱う魔法と相性がいいデバイスだ。

「おおー、流石ティアドロップ社製というべきかなあ。構えた時の

狙いのつけやすさ、重心の位置取り、そして何より一点特化のこのスタイル！　くぅ～分かってるね！」

銃型デバイス使いの心を分かってるね！　と一人納得して目を輝かせている男。そこに、やや不機嫌な声が浴びせられる。

「ちょっと、入口で立ち止まらないでよこのデバイスオタク」

声の主は中々の美少女だった。直次が対決した凛とした琴音とも、生徒会長の九々理の様な可愛らしさとも違う、親しみやすさが滲み出た美少女だ。

「うん？　あんたって、今朝校門の前で一方的に女の子を痛ぶったサディスト君？」

「俺にそんな趣味はない。ってもしかして俺はそんな風に思われてるのか……？」

「まあ途中から見てた人間にとってはそうかも――あ、うちは違うよ？　初めっからバッチシ見てたから。それに、入って早々に喧嘩をする方が非常識だっつうの」

快活な態度でそう捲し立てる少女に対して直次は少しだけ好感を持った。エリート意識が強いこの学園内に置いてこういう人物はかなり貴重だからだ。

「うちの名前は柳田七枝（やなぎだ なえ）。同じクラスの仲間としてこれからよろしく！」

「あ、僕は来宮門司（きのみやもんじ）、よろしく」

「俺は要直次だ。よろしく頼む」

クラス内に人はまばらだ。それは今朝の騒ぎによるところが大きい。始業式の後、指導室送りにはならなかったものの、新入生の半数が遅刻するという事態により、およそ半数の生徒が未だ広い講堂内に取り残され教師達による有難い説教を受けているのだろう。

そのためここに居る生徒は今朝の騒ぎを見ていないか、もしくは途中で興味を失くして去って行った利口な類の人間なのかもしれない。

既にその中にはいくつかのグループが作られた所もある。しかしその中に、直次はある生徒を見かけた。

自分の席でじっと佇む男子生徒。居心地悪そうに身を縮めたその少年は今朝、あの騒ぎの発端となった生徒だ。

頬の辺りにはやや大仰なガーゼが貼られている所を見れば、やはり彼はあのどちらかに殴られていたんだろうか。

「ああ、あの人？　確か“十三会団”の二階堂一族らしいよ？」

「……二階堂、ねぇ――他にも“三大氏族”の人達も何人かいるみたいだし」

「入学式の生徒会長と、あと要っちが叩きのめしたあの子も確かそうだね」

日本に当初現れた魔法使い達はそれぞれが十五の団体であり、そして存在が確認できた彼らの名前には全て一から十三までの数字が含まれていたために、総称して十三会団と呼ばれている。

その十三会団の多くは当時の日本に対して現在の様な技術提供をする代わりに、各魔研の管理を実質支配する環境を作り上げていた。

ここ第一魔研もその例外ではなく、九重一族と二階堂一族がそれぞれ魔研の管理を行っている。

「二階堂一族ったってやっぱ普通の人なのかな？　権力振りかざして威張り散らしてるやつもうちはイヤだけど」

呆れたように手をすくめて見せ、柳田は手近な机の上に座り込む。その瞬間教室内のすべての視線がこちらに向いた気がした要がクラス内を見渡すと、クラスの男子生徒は全て窓の外を熱心に見詰めていた。

「ん、どうかしたの？」

「……いや、とりあえず自分の席にでも座らないか？」

自らも男である要は、当たり障りのない話題でひとまず苦笑して提案する。

※　※　※

一クラスの定員は丁度三十名、一列ごとに五人の計六列。
座席の番号はドア側の列から名前順で決まっているらしく、要の席は二列目の真ん中、来宮はその後ろで、柳田は五列目の一番後ろだった。

あれから少し経った教室は予鈴がなる直前に席が全て埋まった。その中には今朝の少女、七海琴音の姿もある。当然といった風に彼女はこちらの存在を無視したようだが、要が一番気にしていた二階堂の事は幸いにも気付かなかったようだ。

今は目の前の机に内蔵された空中投影型ディスプレイが展開されている。
教壇の前にはまだ若い教師が六名、若干の緊張を伴って立ち、一人の中年の男教師が威風堂々とクラス内を見渡していた。

「えー、私達はあなた方のクラスを担当する教師であり、その内六人の若い教師は昨年この学園の教育課程を修了した新米の先生方です」

魔学研究は常に教員となる人物が少ないため、初めの頃は個人間や企業単位での魔法研究しか出来なかった。それを解消するために、政府側からの要請により立ち上げられたのがこの魔学研究大学付属というスタイルだ。

魔法の研究も然る事ながら、同時に研究の最先端である技術を持った職員を、教師という立場に置くことによってその人員不足を補

おうとするこの政策は、今のところ順調に稼働している。

「これから少なくとも一年間、この先生方と過ごすことになるので、しっかり技術を身につけてください。
それから、これより五人一組の班を作ってもらいます。仲間内で組むもよし、そのままの席順で組むもよし、各々自由に班を構成するように」

ハッキリとした口調でクラス内に告げたその中年教師は、教壇の椅子に座りそれきり無言を貫いた。
痩せ気味の体躯に銀縁眼鏡のその教師はいかにも研究者というべき風貌で、とても教育者とは思えない。まだ若い教師陣の方が先生といっても納得が出来る。

そんなことを考えていた矢先に、要は後ろの来宮にトントンと肩を叩かれた。振り向いて、真剣な表情の来宮が周囲を気にした風に声を発する。

「なあなあ、どうする要。もう一人は柳田で決まりと思うんだけど、あとの二人が中々決まんないぜ？」

既に自分は二人がいるグループに決まっている事に心の中で苦笑する。流れからいえば当然なのかもしれないが、一応こちらの意志も伝えておく。

「何時の間にか俺も頭数に入っちゃいるけど、入るとは一言も言ってないぞ？」

「そんな連れない事言わないでくれよー、僕達もう友達じゃないの」

「そうだな……じゃあ俺の提案も一つ、聞いてくれないか？」

「うんうん聞いちゃう聞いちゃう。で、うちらに提案って何」

いつの間にか背後に近づいていた柳田が要の机に上半身を乗せて占領する。一瞬ディスプレイにノイズが走ったが程なくして元に戻った。

「そうだな――あの二人なんてどうだ」

そう言って要が指示した方向は、依然として俯いたままの二階堂と、不機嫌さを前面に押し出した七海の姿だった。

実力社会におけるヒエラルキー（4）

魔法という技術が世の中に浸透するにつれ、世界中である変化が起きていた。
突然与えられた魔法という力に対し、世界はそれまでの常識を捨てざるを得ない状態となり、結果としてその様相はより単純な実力社会へと変貌を遂げたのだ。

それに、魔法は誰もが扱える万能の力ではなく、ある一定の才能が必要な特別な技術だった事がさらに拍車をかけていた。

高位の存在である魔法師、世界中に存在する魔法学生、それに、魔法を使えない一般の
人間。この関係が世界における絶対の格差として、日々世の中を騒がしている。

第一魔研はその中でも高位の魔法師を排出する名門校の一つだ。その道は魔法の研究職を目指す若者や、軍事関係に従事するものを主とした人物が多く、特に新種の魔法を生み出すことに関しては一番といっていいほどの実績がある。

さらにこの学園の利点はそれだけではない。

学園を支援する有名なデバイスメーカーの新型デバイスを、いち早く試すことが出来るのも人気の一つだ。

※　※　※

「ねえ、その銃型デバイス……もしかしてティアドロップ社の最新モデルかい？」

始業式が終わって自分が振り分けられた教室に入った時のことだ。彼が所属するクラスは１－Ａ。そのクラスに足を踏み入れたその時に背後から彼は見覚えのない男に話しかけられた。

「ちょっと見させてもらってもいいかい？　いいよね？」

「あ、ああ」

あまりの剣幕についつい頷いてしまった要をよそに、男は腰のホルスターから直次のデバイスを取りだす。

銃身に施された一粒の雫とその波紋を描いた精巧な装飾。決して派手さはないが、落ち着いたフォルムと特定の魔法以外では極端に性能が落ちるピーキーな性能が人気のティアドロップ社製のデバイス。

発売名称は『ＭＧＭＡ（マテガアメルデルアー）』。その名が示す通り空気を扱う魔法と相性がいいデバイスだ。

「おおー、流石ティアドロップ社製というべきかなあ。構えた時の狙いのつけやすさ、重心の位置取り、そして何より一点特化のこの

スタイル！　くぅ～分かってるね！」

銃型デバイス使いの心を分かってるね！　と一人納得して目を輝かせている男。そこに、やや不機嫌な声が浴びせられる。

「ちょっと、入口で立ち止まらないでよこのデバイスオタク」

声の主は中々の美少女だった。直次が対決した凛とした七海とも、生徒会長の九々理の様な可愛らしさとも違う、親しみやすさが滲み出た美少女だ。

「うん？　あんたって、今朝校門の前で一方的に女の子を痛ぶったサディスト君？」

「俺にそんな趣味はない！　ってもしかして俺はそんな風に思われてるのか……？」

「まあ途中から見てた人間にとってはそうかも――あ、うちは違うよ？　初めっからバッチシ見てたから。それに、入って早々に喧嘩をする方が非常識だっつうの」

快活な態度でそう捲し立てる少女に対して直次は少しだけ好感を持った。エリート意識が強いこの学園内に置いてこういう人物はかなり貴重だからだ。

「うちの名前は柳田七枝（やなぎだ なえ）。同じクラスの仲間としてこれからよろしく！」

「あ、僕は来宮門司（きのみや もんじ）、よろしく」

「俺は要直次だ。よろしく頼む」

クラス内に人はまばらだ。それは今朝の騒ぎによるところが大きい。始業式の後、指導室送りにはならなかったものの、新入生の半数が遅刻するという事態により、およそ半数の生徒が未だ広い講堂内に取り残され教師達による有難い説教を受けているのだろう。

そのためここに居る生徒は今朝の騒ぎを見ていないか、もしくは途中で興味を失くして去って行った利口な類の人間なのかもしれない。

既にその中にはいくつかのグループが作られた所もある。しかしその中に、直次はある生徒を見かけた。

自分の席でじっと佇む男子生徒。居心地悪そうに身を縮めたその少年は今朝、あの騒ぎの発端となった生徒だ。

頬の辺りにはやや大仰なガーゼが貼られている所を見れば、やはり彼はあのどちらかに殴られていたんだろうか。

「ああ、あの人？　確か“十三会団”の二階堂一族らしいよ？」

「……二階堂、ねぇ――他にも“三大氏族”の人達も何人かいるみたいだし」

「入学式の生徒会長と、あと要っちが叩きのめしたあの子も確かそうだね」

日本に当初現れた魔法使い達はそれぞれが十五の団体であり、そ

して存在が確認できた彼らの名前には全て一から十三までの数字が含まれていたために、総称して十三会団と呼ばれている。

その十三会団の多くは当時の日本に対して現在の様な技術提供をする代わりに、各魔研の管理を実質支配する環境を作り上げていた。

ここ第一魔研もその例外ではなく、九重一族と二階堂一族がそれぞれ魔研の管理を行っている。

「二階堂一族ったってやっぱ普通の人なのかな？　権力振りかざして威張り散らしてるやつもうちはイヤだけど」

呆れたように手をすくめて見せ、柳田は手近な机の上に座り込む。その瞬間教室内のすべての視線がこちらに向いた気がした要がクラス内を見渡すと、クラスの男子生徒は全て窓の外を熱心に見詰めていた。

「ん、どうかしたの？」

「……いや、とりあえず自分の席にでも座らないか？」

自らも男である要は、当たり障りのない話題でひとまず苦笑して提案する。

※　※　※

一クラスの定員は丁度三十名、一列ごとに五人の計六列。
座席の番号はドア側の列から名前順で決まっているらしく、要の席は二列目の真ん中、来宮はその後ろで、柳田は五列目の一番後ろだった。

あれから少し経った教室は予鈴がなる直前に席が全て埋まった。その中には今朝の少女、七海琴音の姿もある。当然といった風に彼女はこちらの存在を無視したようだが、要が一番気にしていた二階堂の事は幸いにも気付かなかったようだ。

今はその教室に一人の教師が立っている。教師と言うよりは科学者と言った方がまだ似あっている風貌の男だ。研究室から直行してきました、とでも言うようなくたびれた白衣がさらに拍車をかけている。

「えー、皆さん初めまして。私はこのクラス担任の笹山といいます。以後よろしく」

定例句のような挨拶を感情も込めず淡々と告げるその姿に、クラスの雰囲気はどこかつまらなそうだ。

「さて、本来ならばここで皆さんに自己紹介の時間があったのですが、“なぜか”大勢の遅刻者が居たらしいので後日に回します。今日はこれから修練場へ向かいますので各自端末の地図を参照して来てください――と、その前にこちらを配ります」

そう言って笹山教諭が取りだしたのは薄い長方形に造られた青い

カード。それを列ごとの枚数を先頭の生徒に渡し全体に行き渡った事を確認してから、そのカードの説明を始めた。

「このカードはこの学園に在籍している事を証明する、いわば生徒証の様なものです。明日から始まる授業ではこのカードに授業の進行度を蓄積していきますので各自大切に保管してください。それから、各施設内にはそれぞれ入室するのに許可が必要な場所があり、その許可もこのカードを使いますので覚えておいてください」

「先生、もしそのカードを失くしてしまった場合はどうなるんですか？」

「そうですね、その場合には学園内の教務室にて再発行の手続きを行います。なお、その際にペナルティとして授業の進行度……つまり成績点を半減しますのでくれぐれも気を付けるように」

クラス内の机から空中投影ディスプレイが出現する。薄い青色の画面に羅列する文字列が幾つも並ぶと、校舎全体の地図が表示され、そこから自身の教室が参照されると修練場までの道のりが映し出される。修練場の位置はこの教室がある棟とは別の棟に表示され、広い敷地の一角が何度も点滅する。

「修練場はこの教室棟から各運動施設が集約された闘技棟にあります……修練場では皆さんの現時点でどれほどの技術があるのかを確認します。それぞれの装備を忘れずに持ってきてください」

※　※　※

修練場に集まった面々は、それぞれの装備を手に持ち各々の時間を過ごしている。その殆どが持っているのは汎用型のデバイスで、要が持っていたような拳銃型――特化型デバイスの使用者は少ない。

その特化型デバイスを持っているのは要と七海、そして柳田と二階堂の四人だけ。その中でも更に異彩を放っていたのは身の丈を越える程のデバイスを持った柳田の姿だった。

それは物語に登場する死神が持っているような大鎌だ。黒塗りの柄はびっしりと術式の文字が書き込まれ、もはや隙間が無いほど埋め尽くされている。刃は潰されているものの、光すらも吸い込むような漆黒の鎌は、何物も切り裂けそうな鋭さを持っている。

修練場の中央に進み出た笹山教諭は、クラスのメンバーを一瞥し特化型の持つデバイスを見て多少驚きつつ無感動に言葉を発する。

「えーそれでは全員いるようなので今から説明をします。今日はこれから一対一の簡単な勝負をしてもらいます。決着の方法は二通り、相手に参ったと言わせるか、一定以上のダメージを負ったと判断した場合です。また今回の戦いではクラス内同士の誰でもかまいません、同時指名の場合は双方に余力があると判断すれば可能です。――では」

それぞれご自由に、と言った直後にクラス内でいくつかの組み合わせが作られた。

「ってなわけだけどーどうするよ直っち」

来宮が要の肩を組んで背後からそう囁きかけた。来宮が持つデバイスは汎用型のコンソールタイプ。手首から腕に掛けて伸びた白い基盤の上を五つのボタンが配置され、その組み合わせによって魔法を発動する。

「うん？　どうするって……俺はお前と手合わせしようかと思ってたんだが」

「うっへぇ、ちょっとそりゃ勘弁。僕はどっちかというと観戦してた方が楽でいい」

「なんだ、そりゃ残念」

来宮が要の誘いを断ったところで――

「なら、私と手合わせ願いましょうか」

背後から鋭い声が飛んできた。

※　※　※

声の主は七海だ。右手に持つ鉄扇型デバイスで要を差し示し、

「今朝の借り……ここで返してもらうわ」

私怨の塊の感情をぶつけてくるのだった。

一方で、要はこの少女をどうあしらうか思案していたが、早々に考え事を取りやめた。

（見た限りの性格上……絶対諦め悪いよなこいつ）

「顔だけはいいのに」

「あんたなんか言った！？」

「いえ、何も」

ふんっと鼻を鳴らしつつ苛々とした面持ちで返答を待つ七海に、要は少しばかりの期待を込めて笹山教諭の様子を探る。幾人かの生徒と話をしているが、大半は首を振っている。

……会話の内容は掴めないが、今は多分役に立たないだろう。試合相手を再度決める時間もない。

だが、開始時間を一番最後に回すことが出来れば制限時間ぎりぎりまで粘る事が出来るかもしれない。そう考えて教諭の視線を外そうとして――

「――ん？」

「――え？」

……目が合った。微笑みかけられた。そして次に何かを確信したように二、三度頷いて見せて――

「では、そこのやる気に満ちた君達からどうぞ」

完全に勘違いされたーっ！　と思う要の一体何が悪かっただろうか。

今となっては知る由もない。

実力社会におけるヒエラルキー（5）（前書き）

一章はこれにて終了。

実力社会におけるヒエラルキー（5）

相対する少女は既に戦闘準備は済んでいる。合図が来るのを今か今かと待ち構え、左手に持った今は柄のみの刀を要に向ける。

それに対して要はこれといった構えを取っていない。今朝の様な気だるげな空気を纏ったまま、視線だけは強い意志を持っている。

厄介だ、と七海は考える。こちらの武装は近接重視のデバイス。一応遠距離用の攻撃手段はあるが、ほとんど使った事が無い上に迎撃専用だ。だからこの手は捨て置く。

あちらは拳銃型デバイス――さらに言えばまだ隠している武装もある。手を付けなかったポーチの中身はなんだろうか。注意して見てもよく分からないというのが現状だ。

緊張が高まっていく。その中でうるさく聞こえる鼓動を何とか鎮めて――

「では、開始（はじめ）っ！」

行った。

※　※　※

「――なっ、」

驚きの声を上げたのは七海の方だった。注視していたはずの開いての姿が消え、それでも反射的に翳した鉄扇に鈍い金属音が鳴る。

「――っち」

仕留めそこなったと言いたげな舌打ちが漏れる。得物は相手の背後に回って見えない。が、背後に隠せるというのであればそう大きな物ではないし、なにより金属の音から察するに――

「短剣の類ねっ！？　それも、突きを主とする」

ダガーと呼ばれる類の短剣だ。

これを用いる際の利点は幾つかある。小型な分機動性が高く、

「……っく！」

銀線が空中に何本も描かれる。高速の切り返しによる残像とそれに付随する形で接触したデバイスに火花が散るからだ。ダガーの刃は人や物を切れる程ではないが、当たればそれなりに痛い。

ちょこまかと……っ！

「しつこいっ！」

ダガーの勢いを鉄扇で逸らさず、強引に押しこむことで続いたはずの連撃のタイミングを外す。――力勝負ではこちらが不利。だったら。

思考をトレースして身体は動きだす。鉄扇を握る手の力を抜く。相手の刃の先端がこちらに向かう――寸前で、僅かに身を沈めて後方へと受け流した。

※　※　※

攻撃の主導権を失ったと感じる前に、要は腰のＭＧＭＡを抜いた。後は引き金に力を入れるだけで不可視の爆発が幾つか生まれるだろう。装着している拡張装備（カートリッジ）は散弾の効果を持つもので、これだけの近距離で放てばまず外さない。

七海が鉄扇を開いて刀身を顕現させるが間に合わないだろう。意外と呆気なかったな、と考えつつその一撃は放たれた。

思ったよりも大きな衝撃が発生した。

周囲の空気を巻き込んで爆発する弾丸は故に彼女には意味を成さなかった。七海が振り切っった左手の柄になんとか刀の刃に見える程度の風が縦長に回転している。まるでチェンソーの様な形状に見えた。

「風を切ったのか……？」

僅かな驚きを持って問われた言葉に、七海は得意げに胸を反らして答える。

「あんたの使うその魔法は空気を圧縮、爆発させる魔法よね？　だったら風の通り道を無理やり作ってそこに誘導すれば、あんたのそれはもう通用しないわ」

「――真空を作って巻き込んだのか」

そうね、と返す響きの奥には、まさか出来ると思わなかったけど、と安堵が続く。そもそも狙ってやったわけでは無く、苦し紛れの一刀だった。

一呼吸入れ、体制を整える。相対する要は全く隙が見えない、まさしく強敵だ。だけどこちらにも手はまだあるのだ。そう簡単にやられはしない。

「行くわよ」

言葉を置き去りにして彼女は行った。

※　※　※

「うっわーおーレベル高いねーこれ」

「というか割とマジな試合展開だけど……私怨入ってるよねこの攻撃」

修練場が振動した。落雷の様な轟音が場内を満たし観客となっている生徒達は一様に耳を塞ぐ。原因は先の再現を今度は地面に向け

て行ったからだ。
斬り払った刀を戻して七海は前方へ足を運ぶ。対して今度は要が後方に跳躍しつつ銃を構える。
風が炸裂する。
「攻守逆転という感じでありますね」
「んーなんか拍子抜けって気もするけど……何て言うか心底つまらなそうな顔して戦ってるのはなんでかな？」
「単に面倒なだけだと思うであります。“女子供に絡まれるのが一番面倒だ”と常々申されてありますので、といってもしかし相性が悪そうでありますな」
「どの辺が？」
「長殿（おさどの）の“騙りの由来”を聞けば納得できるものなのでありますが――まあ今は試合に注目するであります」
「まあそうね……って、んん？」
疑問が浮かんで柳田が隣を見れば、知らない奴がそこにいた。
格好はここ“一高”の制服だ。ただし、他の生徒と決定的に違う部分が二点、ある。ひとつはブレザーの襟もとにつけられた装飾品（バッジ）の形。一回生たる彼らが付けているのは双葉の新芽の形をした緑の装飾品。だが、彼女が付けているのは二回生を示す枝葉を模した茶と緑の装飾品だ。

もう一つは彼女が左腕に付けている赤い腕章。

そこには金糸で“風紀委員”と刺繍されていた。

※　※　※

（……埒があかないな、これじゃ）

目の前にいる少女はひどく厄介だ。なにせ、こちらの攻撃を真正面から叩き潰し、その上それを大したことではないと思っている。

そもそも風とは見えないものだ。魔法によって固定化されているためわずかに存在を把握しやすいが、凝縮から爆発までの間は一秒もない。発生位置も要ですらわからない、ほとんどランダムだ。

しかし、この少女はそれを迎撃しているのだ。戦闘のセンスという点は確かだ。

それに、

（さっきより、見切るのが早いな）

爆風が少しずつ遠くへと移動している。その理由は最適化されてきた刀の振りだ。初撃の太刀筋は眼前を遮る様に振っただけのもの、

だが回を重ねるごとに弾丸との境目が無くなっていき、次弾はついに身体を僅かに掠る程度になった。

要は自身の身体に大きなタメを作り、七海との距離を開ける。

「……なんの真似？」

思わず漏れた声に答えず、要は拳銃型デバイスをホルスターに戻した。

なにを、と告げようとした七海は、

「――ああ、ちょっと小休憩」

続いた宣言に武器を落としかけた。

※　※　※

「なにあれ、ふざけてんの？」

「いえいえ、あれが長殿のスタイルであります。いつも通りの平常運転で安堵しているでありますとも、ええ」

「つまりかなりのマイペース男ってわけだねー直っちは」

「暴論ですがまあ否定はしないであります」

※　※　※

三名がそれぞれの感想を持つ中、要は右腰のポーチから小さなパーツを取りだし、ダガーの柄の底部に嵌めこむ。それから二度、三度と軽く振り感触を確かめると、

「――うし、再開するぞ」

返答は振りかぶられた銀で来た。

開いた鉄扇からは銀の光が散っている。展開された刃は殺傷性の無い平たい形で構成されているが当たりに行こうとは思わない。

ゆえに追撃の逆袈裟斬りを背中を反らして紙一重で躱す。その勢いを利用して背後に一回転すると、構えたダガーで小さく円を描く。そして中心を一直線に突き抜いた。

瞬間、弾けるような音と共に七海の構えた鉄扇に一筋の光が疾走した。

カラカラと何かが転がる音がする。手放された鉄扇が、七海から零れ落ちた音だった。

シン、と静まり返った修練場が再び動きを取り戻したのは数秒後、鉄扇を失った事で手にした刀の結合が解かれたのと同時だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5716w/

プラスロジック

2011年12月19日01時52分発行